

肉豚のと殺適期に関する試験(第Ⅱ報)

坂 井 稔
(長崎県総合農林センター)

SAKAI, Y.

(Ⅱ) Experiments on the most suitable weight for killing crossbred pigs.

Y種を母体にした一代雑種(Y・L)の肉豚のと殺適期については九州農業研究第30号において発表したが、今回はL種を母体にした一代雑種(L・W)および三元雑種(LY・H)についても明らかにするため試験を行なったので、その結果について報告する。

1. 試験方法

供試豚は当場産一代雑種(L・W)3腹(27頭)の子豚を、90kg区、100kg区、110kg区の3区に区分し、三

2. 試験成績

肥育日数，飼料要求率，および肉質

と殺区分	品種(供試数)	肥育日数	飼料要求率	背腰長(Ⅱ)	ロース断面積	ハムの割合	背脂肪の厚さ	と殺歩留
80kg区	LY・H(4)	107日	3.08 (a)	63.1cm	15.8(c)cm ²	32.0(b)%	2.6(b)cm	70.0%
90kg区	LY・H(4)	125	3.05 (a)	64.6	16.1(b)	31.3(b)	3.1(d)	71.0
	L・W(9)	109	3.47 (b)	70.4	15.7(c)	32.0(b)	2.9(c)	72.9
100kg区	LY・H(4)	136	3.17 (a)	66.2	16.2(b)	30.4(c)	3.3(e)	72.7
	L・W(9)	119	3.48 (b)	71.2	17.4(b)	32.2(a)	3.1(d)	74.0
110kg区	L・W(9)	135	3.70 (c)	72.7	18.5(a)	31.8(b)	3.5(e)	74.8

(注)：a, b, c, d, e は産用能力検定成績判定基準によるgrade

(1) 一代雑種(L・W)試験

(イ) 飼料の利用性では、と殺時体重の増加するにともない飼料要求率は高くなる傾向が認められ、90kg区と100kg区ではその差は著しくなかったが、100kg区と110kg区では急にその差が大となった。

(ロ) と肉成績では、体重の増加にともない背腰長(Ⅱ)は長く、またロース断面積は大きく、と肉歩留は高くなる傾向がみられるが、皮下脂肪の厚さは100kg区が限界と思われる。

(2) 三元雑種(LY・H)試験

(イ) 飼料要求率では90kg区が最もよく、ついで80kg区、100kg区の順であった。

(ロ) 肉質では、80kg区と90kg区では著差はなく、100kg区においてやや脂肪層で厚く劣っているが、枝

元雑種(LY・H)1腹(12頭)は、80kg区、90kg区、100kg区の3区に区分し、1豚房(1.7m×2.7m)に3～4頭宛収容した。飼料給与は1日量を3回に等量に分与し、夏期(7～9月)試験期間中は午前と午後の2回にわたって豚房を水洗した。試験飼料は豚産肉能力検定飼料を用い、L種給与基準に準じて与え、体重90kg到達後は95kgまで3.5kg、95～100kgまで3.6kg、100～105kgまで3.7kg、105～110kgまでは3.8kgの日量でそれぞれ飼料を給与した。

肉重量ではと殺時期が遅い程大であり、従って枝肉格付による枝肉価格の差が小さい場合は枝肉重量の大きい100kg区が粗収益で割よくなることも考えられるので、90kg～100kgにかけてと殺することが有利ではないかと思われる。

以上の結果から総括して、大型種を用いた交雑種の肉豚では、現在の豚枝肉取引規格下(いわゆる品種別、年齢別、性別に区分しない)では、飼料の利用性、枝肉の資質からみて、100kgと殺が有利ではないかと思われた。